

不妊治療 臨床例①

“第二子不妊を克服、36才女性”

2004年に第一子を帝王切開術（逆子）で出産。

2006年、第2子を計画するも、なかなか妊娠に至らず。

2009年六月に婦人科を受診、「早期閉経の疑い・卵巣機能低下」と診断される。同年十月に当院を受診。当院で、婦人科での不妊治療を始める前に、中国医学のみによる体質改善のための鍼灸治療を約4ヶ月間、続けられた。

2010年3月から、さらに、鍼灸治療と併用して先端医療による不妊治療も行い、排卵誘発剤、人工授精、ホルモン剤による治療も始められた。見事に1回目の人工授精治療で妊娠に至る。その後は、2週間に1回、妊婦の体調管理のための鍼灸治療を継続し、順調な経過をたどられて、無事に第二子を出産される。



今回の不妊症の方は、

- ・全身の冷えが強く、特に手足と腹部が冷たい
- ・夏の冷房でよく体調を崩す
- ・体型は痩せ型で、下痢しやすい
- ・以前に貧血と診断されたこともある
- ・第一子を出産後は、月経周期は不順になり、月経期間は短く、月経血量も減少

これらを中国医学的な角度から、分析・診断すると「^{ひじんようきょ}脾腎陽虚タイプ」であった。簡単に説明すると、虚弱体質で特に腹部に冷えがある状態をいう。冷えによって身体全体、特に今回の場合は下腹部の血流が悪くなっているために、子宮や卵巣が冷えてしまい、月経痛、月経不順、排卵障害や着床障害を起こしやすい状態になっていた。このような子宮や卵巣など、妊娠に必要な生殖器官の機能が低下した状態を正常な状態に改善するための鍼灸治療は、とても有効。「冷えタイプ」の不妊症に効果のある経穴（ツボ）に温熱作用を与え、体調を調整することによって、妊娠しやすい体質へと改善させていく。中国医学の体質改善の力と西洋医学の先進的な技術力を上手く合わせることで、それぞれの治療の不足を補い合うことが大切。

不妊治療 臨床例②

“多嚢胞性卵巣症候群を克服して出産”

2000年5月 月経不順と不妊で婦人科を受診。多嚢胞性卵巣症候群と診断され、排卵誘剤、卵胞ホルモン、黄体ホルモン等での治療を始める。

2000年12月 なかなか妊娠に至らず、当院を受診。

2001年1月 ホルモン剤などを服用するも副作用が強く、服用をやめ、婦人科での治療を中止。当院で、鍼灸治療を続ける中、月経周期が改善され安定。月経にまつわる不調も軽減。

2002年2月まで1年間、当院で治療されたが、1年ぶりに月経周期が伸びたので婦人科を受診すると妊娠が判明。

2002年10月 無事に元気な男子を出産（当時30才）。現在は、3児の母親に。



多嚢胞性卵巣症候群では、全く排卵しなくなってしまう場合と、時々排卵する場合、月経周期が伸びてしまう場合、黄体機能不全になる場合、など症状は様々。

どの症状をとっても不妊に直結する大きな問題。

今回の不妊症の方は、中国医学的に分析すると、

- ・頭痛、肩こり、月経が遅れる
- ・生理痛が強い
- ・月経血にレバー状の血の塊が含まれる

などの症状から「^{おけつ}瘀血タイプ」と診断。

瘀血（おけつ）とは、うっ血や血行障害など血の流れの滞り、または、それによって引き起こされる様々な症状を指す。鍼灸治療では、骨盤底の血流を改善し、新鮮な血液が十分に卵巣や子宮に行き渡るようにすることで、卵胞の発育を促し、排卵や着床を促進させた。さらに、根源的に身体全体の血流を改善する治療を継続し、妊娠しやすい身体づくりを行う。

鍼灸治療には、

- ・ホルモンバランスを改善し、妊娠しやすい状態を保つ
- ・卵巣の機能を向上させ、質の高い卵子を育てる
- ・子宮の血行促進により、受精卵の着床を安定させるなどの効果がある。

不妊治療 臨床例③

“鍼灸による不妊治療で自然妊娠。42歳女性”

2010年6月交通事故後遺症（むち打ち）の治療に来院、痛みがひどいため、週2～3回来院し鍼灸治療。5回の治療を経て痛みやしびれの症状が改善し始めた頃、不妊症で悩んでいると相談される。

晩婚だが（39歳で結婚）子供がほしいので婦人科を受診。卵管閉塞も無く、全て正常ということで、薬による不妊治療を始めたが、副作用が強くなるため断念したという。

そんなことで鍼灸による不妊治療を始めることにした。

2010年の7月から週3回の鍼治療を行い、体温計測し、排卵周期にタイミング法を行った。12月に月経が遅れたので、婦人科で妊娠検査を受けたところ、見事に妊娠が認められた。翌年、2011年8月無事出産。

今回の不妊症の方は、中国医学的に分析し診断すると、

- ・めまいや立ちくらみを起こしやすい
- ・血圧が低い、全身の倦怠感、顔の血色が悪い
- ・生理周期が遅れる、経血量が少ない

などの症状から「^{けっきよ}血虚タイプ」と診断。



中国医学でいう血虚とは、「^{けつ}血」が不足している状態。西

洋医学でいうと貧血に似ているが、単に「血」が足りないというだけでなく、「血」の持つ濡養(栄養・滋潤)作用が不足した状態。

また「血」には、ホルモンの働きの一部も含まれているため、血虚状態では、子宮内膜が薄くなって経血量が減少し、生理の期間が短くなる、無月経、卵子が小さく質が良くないなどの症状から不妊症に至る。

鍼灸治療で「三陰交」「血海」「足三里」などの経穴（ツボ）の補血作用で、血虚の体質が改善し、月経周期が正常化され、ホルモンバランスの回復から卵子の質の向上、子宮内膜が厚くなり、妊娠しやすい体質へと改善できる。

不妊治療臨床例④

“黄体機能不全を克服して妊娠”

黄体とは、排卵した後、卵巣にある卵胞が変化して作られる妊娠に必要な器官。黄体は、プロゲステロン（黄体ホルモン）を分泌し、受精卵の子宮内膜への着床や、体温を上昇させて妊娠を維持する重要な働きを担っている。

黄体機能不全とは、黄体からのプロゲステロンの分泌が少ない状態。プロゲステロンが少ないと、子宮内膜が十分に厚くならない（受精卵の受け入れ準備が整わない）ので、受精卵が着床しにくく、不妊症の原因となる。

2007年5月 稀発月経（43-45日周期）、過長月経、不妊で婦人科を受診。黄体機能不全と診断され、排卵誘剤（クロミッド）での治療を始める。

2009年8月 妊娠に至らず、当院を受診。

2009年9月 婦人科と当院の鍼灸治療を併用すること1ヶ月。妊娠するも、7週で流産。その後、当院で、鍼灸治療を続け、月経周期の改善。

2010年6月 妊娠が判明。2011年4月 無事に出産。（28才）。

中国医学で分析すると、

- ・手足の冷え、肩こり
- ・月経が遅れる、生理痛
- ・腰痛

などの症状から「腎陽虚^{じんようきょ}タイプ」と診る。



中国医学では、西洋医学でいうホルモン分泌と腎は、密接な関わりがあると考えられており、黄体ホルモンの不足、すなわち腎陽虚が原因であると診る。

この腎陽虚が根本にある不妊症の場合、腎陽のエネルギーが弱いため、身体の陽気が損なわれ、下半身の冷えや下腹部（子宮）の冷えを生じ、結果的に黄体ホルモンの不足、卵胞の発育や黄体の機能低下などの生殖器系の機能低下が引き起こされる。

鍼灸治療では、「温補腎陽」の作用のある経穴（ツボ）腎俞、関元、中極、三陰交に鍼灸することで、身体を温め、生殖器系の機能を向上させ、妊娠しやすい体質へと改善できる。